

女子大学生の進学志望動機に関する研究

宮本 邦雄

大学の大衆化にともない、そこに在籍する学生達は、さまざまな生活歴、価値観、異なった知的能力をもっている。青年後期にあたるこれらの学生達は、さまざまな悩みをもちながら、それぞれのモラトリアムを生きている。彼らの中には、大学生活に不適應となり、長期欠席、留年、あるいは休退学にいたる学生も少なくない。留年については、主要4年制大学の卒業生は76.4%であって、4人に1人が留年していることになるという(松原、1979)。

では、こうした欠席過多や留年、休・退学に至る、学生の大学生活への不適應には、いかなる原因があるのであろうか。そのひとつには、青年期の発達課題を解決できない状態、すなわち自我同一性の拡散の一現象としてのスチューデント・アパシーがあると考えられる。しかし、そうした学生の多くは、アルバイトやクラブ活動などには力を注いでおり、学業面での不適應が主たる問題となっている。

岩村(1979)は、学生相談の経験から、学業面での不適應について次のような因果関係を考えている。

- ①学生の不適應化の構造の中心には、「大学・学部への不一致感・不満感→勉学意欲の低下→不勉強・理解困難・成績不振・留年→修学放棄」の流れがあること。
- ②「不勉強・理解困難・成績不振・留年→意欲低下→不一致感・不満感」という逆の流れがあり、不適應拡大の悪循環の経路を作っていること。
- ③授業や予復習の軽視は、授業への理解困難な

どを招きやすく、不適應化の原因となりやすいこと。

- ④クラブ活動、アルバイトなど勉学以外の活動への過度の集中は、勉学意欲の低い場合に起こりやすく、また必要な勉学をおろそかにさせる障害ともなりがちであること。
- ⑤ノイローゼなどの心理障害は、進路への不一致・不満や、意欲低下、成績不振などを契機として起こる場合があり、また逆に意欲を低下させ、修学の継続を困難にさせるなど、不適應化の原因ともなりがちであること。
- ⑥他の病気、事故、家庭、大学の教育内容など、外的要因も、不適應につながる場合があること。
- ⑦進路に関する軽率な選択や不本意な選択、大学入学までの無理な努力は、進路への不一致・不満、意欲減退などを招きやすく、不適應の原因となりやすいこと。
- ⑧依存的・非主体的、逃避的、主観的など、パーソナリティの未熟やアンバランスは、不適應化の原因となりやすいこと。

また、大学生の不適應現象の原因として、大学入学以前の未熟な進路決定が指摘されている(岨中、1981)。例えば、転学部・転学科した学生の6割を越える者が、進学決定過程に原因のある問題を大学入学後まで持ち込んでいるという結果が示されている(岨中・青木、1983)。さらに、転学、転学科、休学、退学の多くは、1年次の前期に集中しており、この時期の学生指導の重要性が指摘されている(扇谷、1988)。

以上より、大学生活をいかなる状態で開始す

るかは、その後の大学生活への適応に大きな影響をもつと考えられる。適切なガイダンスを行うためにも、新入学生の進学志望動機を把握することが必要である。

では、新入学生は、大学に対していかなる機能を望んでいるのであろうか。

進学志望動機の因子分析的研究によって、浜田(1975)は、大学に入学した1年生を対象に、追従型、学業指向型、学歴重視型、模索型、無自覚型の5因子を見いだした。

また、井上ら(1975)は、東京都内の高校3年生を対象として、男子については、副次的目的、人間形成、人生計画の3因子、女子については、青春享楽、学歴尊重、勉強の3因子を抽出した。学業成績別にみると、成績上位群は、大学の本来的機能を多く指向しており、副次的機能については、成績下位群に多いことを見いだした。

さらに、淵上(1984)は、高校生の進学志望動機についての質問紙による調査を行い、因子分析によって、①大学の本来的機能「専門知識を深めたい、広く教養を身につけたいなど」、②家族への配慮と規範機能「親孝行のため、親が勧めるからなど」、③モラトリアム機能「周りの人が進学するので、まだ社会に出たくないなど」、④大学の副次的機能「大学で多くの人に知り合いたいなど」、⑤大学の経済価値機能「裕福な生活を送りたいなど」といった諸因子を見いだした。そして、進学志望動機の形成には家族の影響が大であること、大学の経済的価値機能をもっている生徒は女子よりも男子に多い傾向があることを示した。これは、女子は男子よりも大学進学の実効的効用をあまり期待していないという、麻生・潮木(1977)の報告と一致している。

男女雇用機会均等法などにみられる時代の変化にともない、女子大学学生の進学志望動機も変化してきたと思われる。本研究の第一の目的は、女子大学への新入学生を対象に進学志望動機を調べ、その構造を分析することである。

さらに、大学は、モラトリアムの場としては格好の事態と考えられるが、一方、高校での進路決定において、将来の職業を決定してしまう

場合も多い。そうした職業的同一性を獲得したと考えられる職業専門学校と学生と比較することにより、女子大学生の進学志望動機の特徴を明らかにすることが第二の目的である。

また、学生の学業生活への適応をはじめとするガイダンスを行う場合、個人の情報を縦断的に把握していくことは、指導上有効であろう。しかし、種々の調査において記名方式をとるか無記名かは、調査の信頼性に大きな影響を与えられると思われる。そこで、記名・無記名両方式により質問紙調査を行い、回答傾向に及ぼす影響を検討することが、第三の目的である。

方 法

質問内容

T女子大学学生については、淵上(1984)の作成した進学志望動機に関する質問項目(45項目、表1)を用いた。また、看護専門学校学生に対しては、質問項目中の「大学」を「看護学校」と変えたものを用いた。進学決定の際に影響を受けた人物を、a教師、b父親、c母親、d兄弟、e姉妹、f伯母、g伯父、h友人、i祖父、j祖母、k従兄、l友人の親、m友人の兄弟、n学校の先輩、o親の知り合い、p近所の人、qその他から1つを選択させた。

調査の実施手続き

a) 調査対象

T私立女子大学学生(110名)、G看護専門学校(以降専門学校とする)学生(39名)。なお、質問紙への記名形式により、女子大学学生62名が記名群、48名が無記名群、専門学校学生18名が記名群、21名が無記名群となった。

b) 調査手続き

調査は、1986年6月に行われた。調査にあたっては、調査者が講義の時間を利用し、クラス毎に集団調査を行った。進学志望動機に関する質問項目は3件法(はい3点、? 2点、いいえ1点)で、進学決定の際影響を受けた人物は多肢選択形式で実施した。

c) データの分析

女子大学新入生に対する進学志望動機調査の結果を、パーソナルコンピュータ(NEC製PC9801)を用いて、統計解析ソフト「自在」(雇

表1 進学志望動機についての因子負荷量

項目の内容	I	II	III	IV	V	h ²
43 専門知識を深めたい	.87	-.04	.03	-.05	-.00	.76
44 専門技術を身につけたい	.83	-.03	.06	-.02	-.02	.70
34 専門職につきたい	.72	-.09	.03	-.03	.06	.62
35 資格取得のため	.57	-.17	.03	.07	-.12	.38
30 自分の個性をみがくため	.51	.16	.39	-.09	-.22	.50
31 趣味や興味を活かせる職につきたい	.41	.08	.35	-.13	.04	.31
3 一流企業に就職したい	.41	.33	.08	.10	.11	.31
21 開放感を味わいたい	-.14	.72	.10	.01	-.21	.60
20 大学で遊びたい	-.17	.64	-.03	-.07	-.10	.45
22 周りの人が進学するので	-.15	.57	.06	.12	.23	.42
5 自由になるお金がほしい	.02	.55	-.02	.13	-.08	.33
1 裕福な生活を送りたい	.19	.53	-.01	.52	.09	.59
19 みえで	-.04	.52	-.37	-.14	.12	.44
2 顔が理知的に見える	.06	.40	-.16	.02	-.01	.19
18 体裁がよいので	-.00	.40	-.44	.31	-.01	.45
32 自分の本当の生き方を見つけたい	.13	.04	.82	-.03	-.00	.70
33 生きがいを見つけるため	.20	.08	.78	.08	-.03	.66
39 自分の可能性を求める	.30	-.03	.61	-.02	-.05	.47
40 自分の能力の限界に挑戦したい	.27	-.08	.55	-.18	-.21	.46
38 くいのない一生を送りたい	.08	-.13	.51	.13	.12	.31
38 人の役に立ちたい	.11	-.34	.49	.16	-.13	.41
12 大学へ入りたい	-.06	.08	.41	.09	-.33	.30
4 自分の子供のため	.02	.09	.17	.66	-.01	.47
16 両親のめんどうをみたい	.10	-.07	.07	.61	-.42	.57
9 親が勧めた	-.17	-.03	-.18	.53	-.01	.34
17 親孝行のため	-.07	.09	-.28	.52	-.19	.40
11 ひまだから	-.21	.25	-.17	.47	.21	.40
6 クラブに入りたい	-.00	-.22	.06	.23	-.54	.40
8 多くの人と知り合いたい	-.07	.09	.02	-.03	-.50	.26
13 外国へ行きたい	.20	.33	.07	.22	-.51	.46
14 都会へ行きたい	.06	.37	-.14	-.05	-.51	.42
24 親から独立したい	-.07	.37	.07	-.35	-.47	.49
25 大学院へ進学するつもりである	.15	-.25	-.06	.08	-.43	.27
41 高校までの内容では満足できない	.29	-.11	.19	-.19	-.43	.35
7 彼女を見つけたい	.20	.36	-.08	.31	-.03	.27
10 仕事の内容がわからない	-.07	.00	.08	.30	.01	.10
15 自分の将来のため	.06	-.03	.31	-.00	-.09	.11
23 社会へまだ出たくない	-.20	.36	.26	.23	.09	.30
26 自分自身のため	.19	-.05	.20	-.10	-.06	.09
27 成績を伸ばすため	.20	.17	.13	.22	-.28	.21
28 大学にあこがれて	-.18	.39	.24	.31	-.18	.38
29 女性でも大学へ行く	-.01	.35	.29	.32	-.28	.39
36 やりたいことをやる	-.06	.12	.17	-.10	.00	.06
42 視野を広くしたい	-.03	.04	.26	.00	.16	.09
45 広く教養を身につけたい	.38	-.11	.05	-.12	-.13	.19
寄与率 (%)	8.54	8.81	9.08	6.52	5.70	38.6

用問題研究会)により、因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。さらに、各項目毎に平均と標準偏差を算出し、女子大学学生と専門学校学生の比較、記名と無記名の比較をt検定により行った。

結果と考察

1. 進学志望動機の因子分析による検討

女子大学学生における質問項目に対する反応の因子分析の結果、次のような5因子が抽出さ

れた。表1は、各因子に対応する質問項目と因子負荷量を示したものである。

第1因子は、「専門的知識を深めたい」、「専門技術を身につけたい」、「専門職につきたい」という、大学の専門教育への欲求を示したものであり、「学業志向型」と名付けた。

第2因子は、「開放感を味わいたい」、「大学で遊びたい」という「享楽指向型」、「周りの人が進学するので」、「みえで」、「体裁がよいので」といった「追随型」の反応であり、「享楽・追随型」とした。

第3因子は、「自分の本当の生き方を見つけない」、「生きがいを見つけるため」、「自分の可能性を求める」といった、「積極的なモラトリアム志向型」である。

第4因子は、「自分の子供のため」、「両親のめんどうをみたい」、「両親が勧めた」、「親孝行のため」という、「家族尊重型」である。

第5因子は、「クラブに入りたい」、「多くの人と知り合いたい」、「外国へ行きたい」、「都会へ行きたい」といった項目群と負の因子負荷量をもつ因子で、「消極型」とでもいえるものである。

次に、以上の各因子と、これまでの研究で報告されている諸因子とを比較してみたい。まず第1因子である「専門教育志向型」は、浜田(1975)の「学業指向型」、井上ら(1975)の「勉強」、瀧上(1984)の「大学の本来的機能」に対応しているといえる。また、第2因子「享楽・追随型」は、浜田(1975)の「追随型」や井上ら(1975)の「青春享楽型」に対応すると考えられる。また、第3因子の「積極的モラトリアム志向」は、浜田(1975)の「模索型」、瀧上(1984)の「モラトリアム機能」に対応している。第4因子である「家庭尊重型」は、浜田(1975)は見いだしていないが、瀧上(1984)の「家族への配慮と規範機能」と一致した項目群である。本研究において特徴的であったのは、最後の第5因子の「消極型」であった。積極的に外へ出て種々の活動をするという欲求とは逆のもので、とにかく大学生活を無事にすごそうという欲求であろうか。

浜田(1975)は共学の男女学生を対象として

おり、井上ら(1975)、瀧上(1984)は高校3年生を対象としていた。女子大学と共学の違いか、高校生と大学生の相違、あるいは時代的背景が関与しているのかも知れない。

2. 学校間の差の検討

それぞれの項目に対する、女子大学学生と専門学校学生の反応をt検定により比較した(表2)。45項目中35項目において有意差がみとめられ、ほとんどの項目において女子大学学生が高い得点を示した。

因子別にみていくと、第1因子の「専門教育志向型」においては、「専門職につきたい、資格取得のため」で専門学校学生が高く、「自分の個性をみがく、趣味や興味を活かせる職につきたい」では、女子大学学生で高い。項目の意味がこうした差をもたらしたと考えられるので、第1因子については両者に一貫した傾向はみられないといえる。

第2因子「享楽・追随型」においては、8項目中6項目で女子大学学生で高い事がみとめられ、「開放感を味わい、遊ぶために」学生生活をおくりたいという欲求、金銭的欲求がみとめられた(5、1項目)。

第3因子「積極的モラトリアム志向型」においても、7項目中6項目で女子大学学生が有意に高いことがみとめられた。これは、専門学校学生が既に自己の進路を決定し、そのための基礎訓練を受けていることと関連していると思われる。

第4因子「家族尊重型」では、5項目中3項目で女子大学学生で高く、「自分の子供のため、両親のめんどうをみたい」という欲求が高い。

第5因子「消極型」においては、7項目全てで女子大学学生が高いことがみとめられた。これは、「クラブに入りたい、多くの人と知り合いたい、外国へ行きたい」といった、専門学校の現状とは合致しない項目群であり、低得点になったことによると思われる。

以上の女子大学学生と専門学校学生の比較から、専門的高等教育を望んでいる点では両群には差がみられないが、自分の生きがいや生き方を見つけようとし、自己の可能性をもとめる欲

求、モラトリアムの場合として開放感を味わうという欲求に関しては、女子大学学生が高い傾向を示すといえる。

3. 記名様式の検討

次に、各項目の反応について、記名式と無記名式の記名様式による比較を行った。平均値間のt検定を行った結果、有意差がみられたのは45項目中2項目であった。(37)「人の役にたちたい」(記名>無記名、 $t=2.418$, $df=127$, $p<.05$)と(42)「視野を広くしたい」(記名>無記名、 $t=2.568$, $df=98$, $p<.05$)という両項目において、記名条件が高い得点を示した。

両者ともポジティブに評価される項目であり、記名による影響があるとも考えられるが、ネガティブと思われる項目群(20、19、11、7など)には有意差がみられないことから、無視できるのではないと思われる。実名記入でなく学籍番号を用いれば、縦断的研究においてのデータの同定には問題はないと考えられよう。

4. 影響を受けた人物について

大学進学を決める際に影響を受けた人物については、教師が最も高く(32.7%)、友人(10.9%)、父親(9%)、母親(7.3%)、兄弟(6.4%)、学校の先輩(5.5%)、母親(2.7%)、従兄(1.9%)、親の知り合い(1.9%)、近所の人(0.9%)、その他(22%)となった。

第4因子の「家族尊重志向」因子の因子得点が高かった学生に、家族(父親、母親、兄弟、姉妹)をあげた割合が比較的高い傾向がみられた(50%)。しかし、その他の因子との関連は明確ではなかった。

5. 進学志望動機と教授=学習過程の分析

前述したように、大学入学直後あるいは1年次の学業への適応は、それ以降の大学生活への適応に大きく関連していると思われる。最後に、進学志望動機や学習動機の問題を、大学教育における教授=学習過程の大きな枠組みの中で考えてみたい。

若林(1977)は、教授学習過程を教授者、学習者、学習材料の3要因にわけ、それぞれの構

成要素をリストアップし図式化した(田中、1980)。まず、教授者の要因としては、専門的知識、能力、経験、期待、気質、そしてパーソナリティを、また学習者の要因としては、知能、レディネス・構え・習慣、年齢、言語化、認知スタイル、パーソナリティ・ストレス・不安、そして動機づけをあげている。さらに、学習材料として、構造・配列・近似度、イメージ価、複雑さ、連想価・意味度・頻度をあげている。そして、教授者と学習者の連関は学習指導であり、学習者と学習材料の連関は、媒体を介した学習方法とストラテジーであり、教授者と学習材料の連関は教材研究であると考えている。

こうした教授=学習過程に関する各要因の教育心理学的研究は、これまで小学校、中学校の義務教育課程に関するものがほとんどであった。しかし近年、高等教育における教育方法の検討の必要性が指摘されている(喜多村、1988;片岡・喜多村、1989)。

さらに、学習者要因については、本研究で取り上げた進学動機や学習動機とともに、聴講法、読書法、ノートの取り方、時間管理、物理的、社会的環境管理、テスト対策などの学習習慣・学習態度(林・滝本、1981)や、Study Skillsの問題(Brown & Holtzman,1972;林、1982、1983、1984)も取り上げられ、学業不適応を未然に防ぐためのパイロット・プログラムも試みられている。

高等教育においては、一応レディネスとしての学力は満たされていると考えられるが、受験勉強では身につけにくい、自己学習能力や学習の仕方すなわち学習スキルについては個人差が大きいと報告されている(林、1982)。そこで、我々が教育的効果を及ぼし得る要因として、まず学習者条件として、学習スキル、動機づけ、自己調節能力、教授者との近接性をあげたい。また、教授者条件として、講義内容、教授方法、教授者の魅力が考えられる。学習材料条件としては、その内容、レベル、構造化の程度、媒体などが考えられよう。さらに大学教育においては、教授=学習過程の場となる環境条件が重要となる。それには、大学の条件として、施設や図書などの物理的条件、教育方針・教育制度な

表2 進学志望動機の学校間の比較 (t検定)

学校 項目	女子大学		専門学校		P
	平均	S D	平均	S D	
43	2.85	.47	2.77	.53	NS
44	2.76	.55	2.82	.50	NS
34	2.59	.69	2.85	.48	*
35	2.67	.65	2.92	.35	**
30	2.77	.52	2.10	.84	***
31	2.85	.49	2.13	.85	***
3	2.05	.84	1.21	.46	***
21	2.28	.81	1.51	.75	***
20	2.15	.81	1.51	.75	***
22	1.69	.88	1.44	.67	***
5	2.45	.77	1.95	.81	***
1	2.46	.76	1.77	.77	***
19	1.52	.74	1.23	.42	**
2	1.59	.61	1.49	.59	NS
18	1.74	.77	1.51	.64	NS
32	2.79	.47	2.23	.73	***
33	2.71	.53	2.28	.78	**
39	2.84	.42	2.26	.71	***
40	2.54	.68	1.95	.71	***
38	2.86	.39	2.56	.67	*
37	2.64	.64	2.59	.59	NS
12	2.81	.46	2.38	.80	**
4	1.85	.80	1.41	.67	**
16	2.33	.80	1.92	.76	**
9	1.77	.88	1.85	.89	NS
17	1.81	.76	2.05	.78	NS
11	1.46	.67	1.21	.52	*
6	2.26	.86	1.15	.36	***
8	2.88	.40	2.21	.91	***
13	2.72	.63	1.33	.52	***
14	2.04	.86	1.23	.48	***
24	2.34	.80	1.85	.80	***
25	1.54	.66	1.15	.48	***
41	2.13	.79	1.56	.71	***
7	1.89	.79	1.28	.50	***
10	1.92	.69	1.64	.73	*
15	2.87	.38	2.82	.50	NS
23	2.34	.82	2.10	.87	NS
26	2.94	.28	2.79	.56	NS
27	2.15	.76	1.41	.59	***
28	2.50	.77	1.64	.77	***
29	2.65	.70	2.10	.87	***
36	2.85	.40	2.13	.79	***
42	2.94	.16	2.44	.78	***
45	2.89	.37	2.23	.77	***

*P<.05 ** P<.01 *** P<.001

どの条件がある。また、各個人をとりまく、友人・家族・アルバイト・サークルなどの社会的条件や経済状態・通学時間などは、間接的ではあるが、教授＝学習過程の効果的な進行に影響する環境要因となるであろう。

本研究においては、女子大学学生の進学動機を取り上げたが、さらに大学入学後の学年が進むにつれ、学習意欲はどう変化するのか、やる気を維持させるためにはどうしたら良いのかという大きな問題が横たわっている。また、学習スキルや学習習慣など学習者条件の他の問題も検討していきたいと考えている。

引用文献

麻生 誠・潮木守一 (1977) 学歴効用論 有斐閣
 W.F.Brown,& W.H.Holtzman (1972) *A Guide to College Survival*. Prentice-Hall, New Jersey.
 淵上克義 (1984) 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究、32、59-63.
 浜田哲郎 (1975) 志望動機の因子構造と因子類型に関する研究 テオリア、18、1-18.
 林 潔 (1981) 大学生の学習技術 新書館
 林 潔 (1982) 学生の Study Skills について 相談学研究、15、10-21.
 林 潔 (1983) 学生の Study Skills について (2) 相談学研究、15、66-74.
 林 潔 (1984) 学生の Study Skills について (3) 相談学研究、16、1-7.
 林 潔・滝本孝雄 (1981) 大学生の学習習慣、学習態度の構造と性格傾向との対応 相談学研究、13、70-78.
 井上健治、上野一彦、野口裕之 (1975) 大学受験と高校生活 (1) 東京大学教育学部紀要、15、103-129.
 岩村 聡 (1979) 学生の勉学・進路・留年・休退学 藤土圭三 (編) 現代学生と精神衛生、北大路書房。
 片岡徳雄・喜多村和之 (1989) 大学授業の研究 玉川大学出版部
 喜多村和之 (1988) 大学教育とは何か 玉川大学出版部
 扇谷 尚 (1988) 大学一年生プログラムの課題 喜多村和之 (編) 大学教育とは何か 玉川大学出版部
 大野 久 (1984) 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究、32、12-21.
 岨中 達 (1981) 受験体験と進路選択 笠原嘉・山田和夫 (編) キャンパスの症状群-現代学生の不安と葛藤- 弘文堂
 岨中 達・青木健次 (1982) 転学部・転学科生の実態-その後の学生生活- 京都大学学生懇話室紀要、12、36-54.
 田中敏隆 (編) (1980) 教育心理学入門 協同出版

[SUMMARY]

A Study of College-oriented Motivation of
Women's College Students

Kunio Miyamoto

The structure of college-oriented motivation of women's college students was studied by Factorial Analysis. The analysis revealed 5 factors as follows, need for academic education, enjoyment and following, active moratorium, family respect, passive idleness. The responses to each item were compared between college students and students of technical (nursery) school, showing that responses of college students were more positive except to the items of 1st factor (need for academic education). Finally, the influence of name-writing was not significant upon the results.